「あなたはキリストを何と思うか」

マルコによる福音書１２章３５－３７節

森島　牧人　牧師

今日のエルサレム神殿の場面も、主イエスの地上での御生涯のクライマックスである「受難」の前一週間の出来事の一つで、記述は短いですが重要なところです。本日の聖書には、神殿の境内で教えておられた主イエスが「どうして律法学者たちは『メシアはダビデの子だ』というのか。」と問われたとあります（マルコ１２：３５）。

苦難の中にあったイラスエルの民を王として国を統一したダビデは、「ダビデ大王」として英雄視され、民族の誇りとして揺るぎない存在でした。それは主イエスの時代でも変わらず、故にかつてのダビデの国を再現出来るメシアは、ダビデの家を出自とすると信じられていたのです。

新約聖書には、主イエスの父・ヨセフもダビデの家に連なると記されていますが、病人たちが「主よ、ダビデの子よ。わたしを憐れんでください。」と主に呼びかけ癒された時、主は「決してこの事を他人に言ってはいけない」と口止めされました。さらに、主が五千人の群衆をパン五つと魚二匹で満腹にされたのを見た人々が、主イエスを王にするために連れて行こうとしたときには、主は独り山に退かれたと聖書は記しています。そして主のエルサレム入城の際では、群衆は「ダビデの子にホサナ（救い給え）」と叫び、熱狂的に主を迎えたのです。そのようなことがあって、今日の御言葉「何故、『メシアはダビデの子だ』というのか。」が発せられたのです。

この時主は詩篇１１０篇１節「ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。『主はわたしの主にお告げになった。【わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を　あなたの足もとに屈服させるときまで】と。』を引用し、「このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか」（同１２：３５－３７）と言われます。

「主」が二つ出て来て分かりにくいですが、最初の主は「ヤハウェ」で二つめは「メシア・主イエス」です。つまり＜ダビデが主と呼ぶメシアはダビデの子孫などではなく、ダビデが主として崇め礼拝する存在であること＞を言われているのです。しかし当時の人々が待っていた救い主は、正に「ダビデの子」、この世の国家の王様としての存在でした。ここで主は、自分は＜その意味での＞メシア・救い主ではないことを明確にされたのです。

間もなく主イエスは捕らえられ、ローマ総督ピラトの尋問を受けられますが、「お前はユダヤ人の王なのか。」とピラトが尋ねたのに対し主は「・・・わたしの国はこの世に属していない。」とお答えになっています。自分たちの国こそが＜神の国＞だとするイスラエルの民に、主は＜神の国は、世界の中にある国々の一つ＞というものではないと明言されているのです。

それでは神の国はどこにあって、それはいつ来ると主は言われているのでしょうか。それを問うたファリサイ派に「神の国は見える形では来ない。・・・実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」（ルカ１７：２１）と答え、同１１：２０には「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたのところに来ているのだ。」と、主イエスは明確に答えたのです。悪霊を追い出す癒しは、＜神の憐みの力＞がキリストを通して与えられたのであり、それが現れたところはどこでも神の国であると言われているのです。

エルサレム入城より前に、主は弟子たちに「わたしを何者だと言うのか。」と問いました。ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です。」と信仰告白をした時、主は弟子たちに御自身の＜受難＞を予告されました。そして遂に来た捕縛の日に、剣を取った弟子を戒めて、「わたしが父に（援軍を）お願いできないとでも思うのか。・・・しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。」（同２６：５３－５４）と言われ、ゲッセマネの園でも「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」（同２６：３９）と祈られました。つまり神の定められたことの完成のために主イエスが＜神の子＞として飲むべき＜杯＞は、十字架の受難と死でした。神の約束の実現のために、苦しみつつ父の御心に従う決心をして進まれたメシア・主イエスの出来事の中に、人間の救いが完成されて行ったのです。神が御子を犠牲にしてまでも人間を救おうとされた、それが「愛」（アガペー）です。

主の十字架は、二千年前と同じように現在も神の限りない愛と力を示し、罪人である私たちを招いて、信じる者たちに力を与え、立ち上がることが出来るようにしてくださっています。＜神の国、神の支配、神の愛＞は、私たちの間に、この教会の私たちと共に、現在もあると主は言われているのです。

（説教要約　羽入田悦子）